広報 なりた 市民を大切にする市政

成田歴史玉手箱

●22回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

伝統の心を今に伝え、そして未来へ

大室・土室・幡谷に伝わる獅子舞

神楽櫃を曳く土室高崎地区の子どもたちと保存会のみなさん
（昭和63年、高崎神楽保存会所蔵）

昭和59年4月、復活した土室の獅子舞「鈴の舞」（土室神楽保存会所蔵）

桜舞う4月、市内各地の神社では獅子舞の行事が盛んに行われます。大室の八幡神社・稲荷神社、土室の鹿島神社、幡谷の香取神社では、五穀豊穣・無病息災・悪魔払いを願う獅子舞が奉納されます。土室と幡谷地区では、今でも子どもたちや保存会の人々が、万灯や花飾りで飾られた神楽櫃と呼ばれる車を曳きながら神社に向かいます。

この獅子舞は、今から約170年前の天保年間（1830～1844）に茨城県から丸一神楽の系統をひく社中によって、大室村（現成田市大室）へもたらされ、その後隣村の土室へ、そして土室の若者たちによって幡谷の地に伝えられたといわれています。

神社では、小御門神社（下総町）の宮司による祭礼のあと、獅子舞が奉納されます。この時舞われる獅子舞は、布舞、幣束舞、剣の舞の3部構成となっています。土室の鹿島神社では、2つの地区が獅子舞を奉納します。最初に台地区の布舞、幣束舞、鈴の舞、続いて高崎地区の布舞、幣束舞、剣の舞が行われます。

終戦後から昭和30年代半ばまでは、神社での祭礼が終わると、神楽櫃を曳きながら村の全戸を回り獅子舞を舞っていたので、2日間にわたり祭りが行われました。娯楽の少ない時代で、「唯一村中のみんなが楽しめる行事でしたよ」と言います。各家々で振る舞われる酒（当時はどぶろく）で腰がたたなくなり、大八車に乗せられて家に帰る人もいたそうです。現在は、区長・神社総代や新築の家など希望者に限られたものとなりました。

昭和30年代も半ばを過ぎると、農村の生活様式が大きく変わり、若者たちが農業を離れ都会へと流れ、神楽の継承が困難な時代となりました。しかし昭和50年代になると、戦後神楽をしていた人々の子どもたちによって保存会が結成され復活しました。

舞の所作やお囃子の習得は、すべて長老からの伝承です。「舞手や子どもも減少し、また神楽櫃を曳けなくなった地区もあります。10年後20年後が心配。祭りは、人と人を結びつけます。響きわたる太鼓や笛の音を次世代へ伝えたい」と話す保存会のみなさん。ことしの獅子舞は、土室では4月6日、幡谷では13日です。また、大室では、13日（未決定）を予定しています。

昭和30年代初期、幡谷香取神社での獅子舞が中断される直前のスナップ写真。祭りを盛り上げるための女装に注目。（久住第一小校庭で撮影。葛生惣重郎氏所蔵）

編集後記

現在市内に住民登録している外国の人は約2,400人。この数は中郷地区の全人口より多く、豊住地区のそれとほぼ同じですから、もはや外国人だけで一つの地区が成り立つほどです。そんな訳で「外国人座談会」ではいろいろな意見が出ましたが、取材をしていてドキッとさせられたのは、「子どもが高校に入ったころから親子の会話が少なくなり…」という発言。この悩みばかりは日本人も同じです。

広報なりたは再生紙を使用しています。